畫本 二

2

帚木　ウタヲ名トス源氏十二ヨリ十六ニテノ事ヲ此内ニ篭ル古説ニ桐ツボノ并ノヨミ
是ハアシキセツ也此巻一部ノ序文也帚木ト云ニテアラハヽ
此哥ヲ以テ名トス又　新古ソノハラヤフセヤニオフル帚木ノ有トハミユテアハヌ君カナ　帚木ノ心モシラスソノハラノ道ニアヤナクマトヒヌル哉
信濃ノ名所也
△夢浮橋ハ近江ノ首尾ハ八キハトニテ相當セリ有無ノ二ツ可成
△花鳥云此巻ノ雨夜ノ品定ハ源氏十六中将ノ時ノ事ヽ比ハ五六月ニ見タリ桐壷ノ末ノ段ト此巻ノ初段ト一ニ可見也
△光源氏ノ名ノミコトヽシウ　此発端桐ツボノ末ニコモウトノ付タル光ト云ル名ノ所ニテヰセ付タリ
君子ノ徳無色無臭ニ光トコトヽシウトガ有名ノ立末ハ必キズ付ナラヒ成ヘシ
△云ケタレ給フトガ　河海ニコトヽシウト句ヲ切テ見ルト云リ不切共ヽ花鳥云イヒケタレ給トガトハ悪口ノ源氏ヲ悪サニ云ケシ給トガ多シトヽ
△イトヽカヽルスキ事　是ヨリ源氏ノ作フル事イヘ数奇ハソロハヌヽスキ事　花鳥云好色ト云説アレ共サハミエス光源氏トイヘル名ヲスキ事トハ云ルヽ下ノ詞ニカロヒタル名ヲヤナカサムト云ニテ文エ侍リ
△カクロヘ事　隠事ヽ源氏ヲヨモウトニカクシ所見セ有タルヲモ云セツ有
△人ノ物云サカナサ　式アトガラシ、云シ形ヲサヽ是此巻ノ序也　引ラ彦ニシモ十二ヽアフラニ女郎花人ノ物イヒサカニクキ世ニ
△ナヨヒカ　ヨハキヽ
△莫笑
△カタノヽ少将　業平ヲナハタヽメニ宿カラテノ哥ノ事交野ニ一宿ス是ニヨリテ此名アリト云英明中将モ交野中将ト云其外哥々ノ説有
△交野ノ少将　交野ノ少将ト云フルキ物語有トヽ清拾草紙ニコニハ物語カタノヽ少将有此物語ト云ハ上ニ好色ヲタテ内ニ実心有ヽ源氏ハ上ニ実ヲカザリ内心好色有故ウラ表ナル間笑ハレタニハントヽ
此哥十三首有　多(ワキカ)概

軽ビ　此ヒハヒレヽ、ヒハ神ヽ軽キ事ニ羽翼ノ付心

ヨウシ　召ヲ志ノ事ヽ源氏中将ノ時ノ事ハ其格チメル物故ヽ
シノフノミタレ　春日野ノワカ紫ノ哥タレ故ニヤト云心ヽ

ひかる源氏なのみことことしういひけたれ給ふ
とかおほかなるにいとゝかゝるすき事ともを
すゑの世にもきゝつたへてかろひたる名をやなかさ
むと忍ひ給ひけるかくろへ事をさへかたりつたへ
けん人のものいひさかなさよさるはいといたく
世をはゝかりまめたち給ひけるほとなよひかにをかし
き事はなくてかたのゝ少将にはわらはれ給ひ
けんかしまた中将なとにものし給ひし時はうち
にのみさふらひようし給ひておほいとのにはたえ
たえまかて給ふしのふのみたれやとうたかひきこゆる
事もありしかとさしもあためきめなれたる

蘭杜

うちつけのすき〴〵しさなとはこのましからぬ御
本上にてまれにはあなかちにひきたかへ心つく
しなる事を御心におほしとゝむるくせなんあや
にくにてさるましき御ふるまひもうちましりける
なか雨はれまなきころうちの御ものいみさしつゝ
きていとゝなかゐさふらひ給を大殿にはおほつかな
くうらめしくおほしたれとよろつの御
よそひなにくれとめつらしきさまにてうしいて
給ひつゝ御むすこの君たちたゝこの御とのゐ所の
宮つかへをつとめ給宮はらの中将はなかにした
しくなれきこえ給てあそひたはふれをもひと

よりは心やすくなれ〳〵しくふるまひたり右の大臣の
いたはりかしつき給すみかはこの君もいと
ものうくしてすきかましきあた人なり
里にてもわかかたのしつらひまはゆくして君の出入し給
にうちつれきこえ給つゝよるひる学もんをも
あそひをももろともにしてをさ〳〵たちおくれす
いつくにてもまつはれきこえ給ほとにをのつから
かしこまりもえをかす心のうちに思ふ事を
もかくしあへすなんむつれきこえ給けるつれ〳〵と
ふりくらしてしめやかなるよひの雨にてん上にも
をさ〳〵人すくなに御とのゐ所もれいよりはのと

オホトオフラ タンケ
イレ文選ニタシケ
イノ二字ヲトオフラ

やうかるんちはるゝ小和陽と奈ふうちかくてふゝ代
なとみ竹にいそにちりきさみはしなゝ色ゝ紙のみ
あるゝらも淡ひ義いそゝ中将わかなくゆかし
かまいはさわぬへ義すゝいみきん嫁ゝい奈ふへきき
もちうとゆるし竹りゆんそみうちとけてのたりゝ
いうしとお陽さまむこうゆうしはまをしなへさふ
和ほのゝ乃いうはふゝ孫とおとくゝかつきてゝき
かゝしはゝみねなんとのおもてうゝあしきおわ
くきおちかなゝむりの蓄なとれゝうろん而いあゝ
めとゑむすまとだやむちとなくせちにすく竹へきき
もとい[illegible]やうよ和陽ずうあるみゝしなとかうち

経典ハ手箱ノ
艶書ハ上ヲ見エタリ 好色ノ文ニハ色アル紙色々ノ紙ヲ用ユ
切ハウグイ
頑 カタハライ年ニ又片端
久中
押并ハ世間流布ノアサキ人大カタハ文并ノ汎ホナキ大カタノハ秋モ推シタルトヽ
谷自溪 一カ袋人丸辛ニヲノカシヽヒトシノスランイモニコヒ日毎ニヤセヌ人ニシラレス 春ハ梅 秋ハニカキノ菊ノ花ヲヲカシ、コンチニシカリーナ 覚之
怨ハ 心中ニウラム心
怨
大統 オヽキニスフルーツ
大切

まむらし給へくもはゝすふのえとかなきぬく
かめまるえいニ乃まちのおゝ給やす義なる庵し
うらりしはくえるふよくさぬくかるもみともは
けまとてんあてみそれのかまのなとかふ中ふいひ
あはろもあわりえたるまさはり乃も思ひちぎて
うつのふを和のしとあみをかゝちとすくなりして
かゝくまきゝりしはゝとのかくし給つうこみきう
於陽久済とへ給ふらめすゝしみたやさそなんこれ
つしもちゝ給よくひゝくへきとのまへさ御
給んしかもしろあんしうかゝく侍らめぬとぞえ
給はぬてりぬ一母乃まいはもとなんはゝくましたて

心あて 心アテニオラハヤオラシハウシモノヲキミトハロル白キクノ花
ソコ 是ヨリ四同音 オヤヨリトミルハアシヽ
サノコレハシモト 多ハ
其治ノ両夜ハ品定ナニ 又ハ高ヲ秀ヲヨルノコトノ
ニハシメノタナソ
シシハカリ也ナリ
双紙
係行 久中ヲサス
足下 旅心
久中ノ行
一中 初
雑
体字

オトシメ　ミニクキ文
才品カタチ人ニキハ人ヲオトシメニミルヘシ

オヤナト　是ヨリ
四問答ノ初中ね也

オヒサキ　何 粃芽ノ苗曰
草ノ生長ニ未嫁女ヲタトヘタルヘシ
楊家有女初長成 養在深窓人不識　長恨哥

カタカト　片オ日本紀
片隅

うらくもはらなやうやうくなんえ竹へしは
たくうまへりれのなきけめそりしまうふみおわらし（句）
のいうへんえそうちしなどだうのはずいかむよ（色平）（何 ソノ人ソカニシタガヒテヨロシキト）
さ稽しき義もおかうのとみたまふまどうも侍ること（其ニ於テ九ヘキハカノキ）（何ソレモ）
ふうみらさとをわりそむえうひりかなしくも侍（抗ハアエル之アエルハ在之）
ましさはいと不うしや我のんえたるとそのわ哉（エラミ上サセテ）
をのがきてこ縁をやわて人をくれとしめさ侍は
なとうさりくいこさすおふうわおやなとだちそひ（一所）（二）
もそわがめてあひされこも遠侍まどの中なるおと（崇）（大）
もたくうたかどをきてはくえてあつ縁をうこうひ（未備ニ）
事もあめわからちたるしくうちたおれどもおわらの（オフヤウ）

スヘタ人ヲ〔 〕くるう
娯ノ備カザリニテアラネ
見ニサヤウニハアラシト
シトシテアルナリモナラ

思ノタサニ　何下之
或説腐也

やうかはりてまで花物かしき事なき程はうち義すおもむきも（物ニキラハキヤウナキヲイフ）（有ノ）
人まゐりんをいるゝうすもわはれをのほかゝ
ひとりゆくつきて志いはける事もわかれる人をも（何 由付ユヘアリテ）（故付一アル）（妹ノ信言）
またるうしをらひかくしさてあわぬへきかゝ
をいはくろひてまうひ出すりそましきのあしと
うつにいうしさをそうわおもひくさゝむ侍こと
ことみもそめりみおとらせぬやういなくなん
おはへきとうめきなくしおもそはしけなき（ウキん）（久中自言恥ソ）
いかむなくていおうの孫と我もおりしあさまうすや（源氏ムラサキニ）
あるむうちはる恵みてそれのたおとゝものなきひとは（源氏）（二條）（付句未了花二ノ弟）
あらんやとの給へるをもさいわなしむあさわやは（三條）（久中ね色答ソノ）

誰かはすかされより侍らんとるかたなくくちをしききはというなりとおぼゆばかりすぐれたるとはかずひとしくこそ侍らめ人のしなたかくむまれぬれは人にもてかしづかれてかくるゝことおほくしぜんにそのけはひこよなかるへし中のしなになん人の心ゞをのがじゝのたてたるおもむきも見えてわかるへきことかた〴〵おほかるへししものきざみといふきはゝことにみゝたゝずかしとていとくまなげなるけしきなるもゆかしくてその品ゞやいかにいつれを三つの品にをきてかわくへきもとの品たかくむまれなから身は

しづみくらゐみじかくて人げなき又なほ人のかむだちめなどまでなりのぼりわれはがほにて家のうちをかざり人におとらじと思へるそのけぢめをばいかゞわくへきととひ給ふ程にひだりのむまのかみとう式部のぞう御物いみにこもらむとて参れり世のすきものにて物よくいひとをれるを中将まちとりてこの品ゞをわきまへ定めあらそふいときゝにくき事おほかりなりのぼれどももとよりさるべきすぢならぬは世人の思へることもさはいへどなをことなり又もとはやむごとなきすぢなれど世にふるたつきすくなく時世に

トルカタナシノ— 上智下愚ハ不移ノ心也
タハカルト云心リ
透心
優也 オボユバカリ
下品ノ人
上品ノ人
カクルヽ事ハ多シ
ケハヒ 形勢
位卑トキコソ
直人
ケヂメ 掲目 結目
左馬 式部 両人不知
元来非貴人
末摘ニアリ
便

うつろひておほえおとろへぬれハ心ハこゝろと
してことたらすわろひたることともいてくるわさ
なめれハとり〳〵にことわりて中の品にそをく
へきすりやうといひて人の國の事にかゝつら
ひいとなみて品さたまりたる中にも又きさみ〳〵
ありて中のしなのけしうハあらぬえりいてつ
へきころほひなりなま〳〵のかんたちめよりも非
參議の四位とものよおほえくちおしからすもと
のねさしいやしからぬやすらかに身をもて
なしふるまひたるいとかはらかなりや家のうちに
たらぬ事なとはたなかめるまゝにはふかすまはゆき

まてもてかしつけるむすめなとのおとしめかたく
おひいつるもあまたあるへし宮つかへにいてたちて
思ひかけぬさいはひとりいつるためしともおほか
りかしなといへはすへてにきはゝしきによるへき
ななりとてわらひ給ふを事人のいはんやうに心え
すおほせらると中將にくむもとのしなときよの
おほえうちあひやむことなきあたりのうち〳〵
のもてなしけはひをくれたらんはさらにもいは
すなにしてかくおひいてけんといふかひなく
おほゆへしうちあひてすくれたらんもことはり
はさるへきことゝおほえてめつらかなることゝ心も

父ノ年オヒ
或ア々父ノ年オヒ兄ハ
或アカヽホニノサケ劣ニ

おとゝはくましなすよりもおやよりふへまなとなる絵は
かくのかたへいうちまゐらせねさて世にあはと入り
忘しまゐすさめしくいのまゐたらんむくろの門よ思ひ
のほうのふらうたけなるむ人にとちられたらんきう
まきさまにはいめつゝしもはいお母へまいりゝてりぬ
うつまりん給思ふちゝたちへ御ことなんおやまさく
ん給ますにわさにわちこのとしおいぬむ法のしけは
ふとわはゝせうとのゝかゆくさまおもひやわこと
おる事に義ねやのうちみい給りたく思ひあのわ
はうなくさいりてさほさるにわさもゆへかうゝすべく
た続んかゝこゝおとかせとものゝ思ひの母よふあし

シトケナク サシスキハ
以メサルヘシ直衣ノ下
カサネヲ略シヌニヘ作
シトケナク取乱タルヲモ不結トアルヘシ
ホカケ 同火
豊玉姫ノウノハフキ
アハセスノ産玉ノ時
又側影 ホノカナルカケ

かゝさゝむまてさにやふうたのえゝひゐまう
我よはさゝめさるそこめてすそうとさ物なへとそ
歌をとゝやれさ戦いもう給ともの家物きえ
お家をおりひての絵ふよやとやんうゝんりのえい
りほいてやうみのきれとおりふふさゆるけなる
世をと君いおかの庵しさ続きたそともの方おうか
あるに家しもうりをまとけなく歩みし絵てひを
なとゑうちすてゝそひみし絵へる法かうけをい給
めて給く女まそえたてまはら家りしさ死活にあに
えかゝのこのみをえうり出ても折何く家しくみえ絵
はまかくみえ人のう色ともをうゝりおをせはゝにおふ

大方ノ世ノ人ニシテミレハ無上ニミユルモ我妻ニ得テミレハ能ハナキトナリ

おほかたの世につけてみるにはとかなきもわか物と
うちたのむへきをえらむにおほかる中にもえなん
おもひさたむましかりけるをのこのおほやけ（男イナシテ云）
につかうまつりはかはかしき世のかためとなるへき
もまことのうつはものとなるへきをとりいたさん
にはかたかるへしかしされとかしこしとても
ひとりふたり世中をまつりことしるへきならねは
かみはしもにたすけられしもはかみになひきて
事ひろきにゆつらふらんせはき家のうちのあるし
とすへき人ひとりを思めくらすにたらはてあ
しかるへき大事ともなんかたかたにおほかると

ゴナハナシ　カミハ下ニ…上以風化下下以風刺上（詩序）上合淳徳以遇其下下懐忠信以事其上（史記）
上之化猶風靡草
左傳曰詩刑于寡妻至于兄弟以御于家邦　注曰詩大雅也言文王之教自近及遠也寡妻嫡妻謂大姒也
國ヲ治メント思ハヽ先家ヲ治メ家ヲ治ムルモノハ先身ヲ治ムル心ニテ序ニ以一國之事繫一人之本

トスレハカヽリアフサキルサニ古今ソヘニトテトスレハカヽリカクスレハアナイヒシラスアフサキルサニ八雲御抄云アフサキルサハトスルモカクスルモ

あれはかゝりあふさきるさにてなのめにさても
ありぬへき人のすくなきをすきすきしき心のすさ
ひにて人のありさまをあまたみあはせんのこのみ
ならねとひとへに思ひさたむへきよるへとすはかり
におなしくはわか力いりをしなをしひきつくろ
ふへき所なく心にかなふやうにもやとえらひそめ
つる人のさたまりかたきなるへしかならすしも
わか思ふにかなはねとみそめつるちきりはかりを
すてかたくおもひとまる人はものまめやかなりと
みえさてたもたるゝ女のためも心にくゝおしはか
らるゝなりされとなにか世のありさまをみたまへ

詩ニ左右ニ芼之…一方能ハ一方アシキハソヘニトテハサフハト云心也
ヰイケンニモセス能妻有ニシトシ

あつむるままに心およはすいとゆかしきことも
なしやきんたちのかみなきえらひにはましていか
はかりの人かはたらひたまはむかたちきたなけなく
わかやかなるほとのをのかしゝはちりもつかしと
身をもてなしふみをかけとおほとかにことえりをし
すみつきほのかに心もとなくおもはせつゝまたさや
かにも見てしかなとすへなくまたせわつかなる
こゑきくはかりいひよれといきのしたにひき
いれことすくなゝるかいとよくもてかくすなり
けりなよひかに女しとみれはあまりなさけにひき
こめられてとりなせはあためくこれをはしめのなん

又サヤカ 同ニ文ノテイ
大方ナルニニ行ケハ
ミタセカ思ヲサスル也
スヘナク 同
無便 タヨリナキ也
古今長哥
アハレトモ君ヲハヤラシ

とすへしことか中になのめなるましき人の
うしろみのかたはもののあはれしりすくしはかなき
ついてのなさけありをかしきにすゝめるかたなく
てもよかるへしとみえたるに又まめまめしきすち
をたてゝ耳はさみかちにひさうなきいへとうしの
ひとへにうちとけたるうしろみはかりをして朝夕の
いていりにつけてもおほやけわたくしの人の
たゝすまひよきあしきことのめにも耳にも
とまるありさまをうとき人にわさとうちまね
はむやはちかくてみむ人のきゝわき思ひしるへか
らむにかたりもあはせはやとうちもゑまれ

ナノメナルマシキ
ヒサウナキ家トウシ
同 無美相 又無貿相
主人妻
家童子
近クテ見ニ人ノ
語合度トナリ

猴モサシツノ三　古ヘノ野中ノ清水アルカラニサシクムモノハ間ナリケリ
何ナニタノサシイヅル心ニ哥ニモサシクムモノハ間ナリケリトアリ間ム何ナリシ
八雲抄ニハサシアタリ
テト云心ヘトアリ
公務立登　公リ
心ニ不云ハラ立コモ
事ニナラテハ

なかなかなるよそよそしくとりしはあやなきおほやけわる
さもしくんひよりふかわりひはまなき事なとおほ
うほをとなまみのはきうをむと思へいう能ゆむのま
て人まえぬ思ひいそわらひもせぬあらともうちひ
とわさとはかなよするおりとなるおりはうふさしあり
き井かるむいりのいくちおしうぬたひろ

アハツカニ　何ナソ男ノ
物思テイシミテ女ノ
男ヲアフキコトナサハカ
ステイサレハ男イカサロウシカルヘキト
何淡シキハ君子之交也淡如水　荘子

おほりこめきて庭りうなるむ人をとかくひ
はくるひてさふかとのみさうむもあらけれなくとも
為しあるくちすへしおふさしむのひてこん
程そさてもらうきうえりほこゆるしえる庵
をはちゐ来てはさ宿へきあとをもらひやつきわ

コメキ　巨細　大小
幼ナガマシキ

かしふ志いてんまされあさまゆも庭めととかも
我んともうふゝうふくふきさいさわなうゝむは
いとくちおしくみえもしけなれともやなをくる
しのゝむつ孫はすしうはくしゝんつよれ
きん乃おのふしよはきそいでもへゐるやうもあわ
うしなとく庭なたりのいひもさめうゝていさく
うちなけくゑいたゝ志風ふもよしゝうちなれ
さうかもいりいとくちおしくねちけのましきお
おもえたなくいいゝえとへりも乃まめやうふわ
志はりかなんのおもむきなるむよふへなうはぬの
まれこあうりい思ひなくへうわくはあまわのゆへ

ソハくシク　向側
ソハツキサレハミトラ云
ル日心
前ニ能ニワロキアルラ
クニナキヤイヒモ
何古今ノ思フテフ人ノ
心ノクマコトニ立隠ワミルヨシモ哉
曲目子化　隈　熊　阿　間
子チケカニシキ
何佞人　日才佗
論語注曰佞人口辞
捷給数為民所憎者也又曰佞口才也又曰佞人假仁者之色行之則疑
コノ手カシハ大トナトト云者也　此木ノ葉風ニフカレテノアナタコナタヘムクハソレヨリニオモテトミヘア・ナコナヘムキテア
物イヒスル人ニセタル　カハナラ山ノコノ手カシハノフタオモテトニモカクニモ子チケ人カモ
ナリ。真ヤシ子チケ人
ト云
アセリノユヘヨシ志ハヘ
何ユヘヲキヨシハミタル
心ニ

ウシロヤスク——
心サヘヨクハ上ハツケ
シシテナラスヘキト也
ウヘハツレナク
後セニ蓮葉ノ上ハツレ
ナキウラミコソモノ
アラカイハワクト云ナ
心ヒトツニ　上ハ云ニ
哥ヲヨミ男ニシノハ
ワヘウシテノ行ホミヘヌヤウニ男ニカクル心也ハアシキ也
気ナル哥ヲ
堀百　アハレニモミカ
ホニモユル蛍哉コエ
ナクヘキ世ト思フニ
我シ君ナニハノウラニ
アリシカハウキメヲミ
ツノアマトナリニキ

よし心はせうちそへたらむをはよろこひにおもひ
すこしおくるゝかたあらむをもあなかちにもと
めくはへし後やすくのとけき所たにつよくは
うはへのなさけはをのつからもてつけつへきわさ
をやえんにものはちしてうらみいふへきことをも
見しらぬさまにしのひてうへはつれなくみさをつくり
心ひとつに思ひあまるときはいはんかたなく
すこきことのはあはれなるうたをよみおきしのはる
へきかたみをとゝめてふかき山里世はなれたる
うみつらなとにはひかくれぬるをりわらはに侍りし
時女房なとの物かたりよみしをききていとあはれ

心サシフカヽラン
男ヨリ物語ノ文章
ハ伊勢物語ニカナヘリ
男ノ志深ヲシラスカクレテ後ノナケキト為女ノヲロカナル也
ホメタテラレテ
他人ニホメラレヤウニ
ノル心ハ尼ニ為ル也
イセ物語ノ女ノ底心ニヤ思案也

かなしく心ふかき事かなと涙をさへなんおとし
侍りし今思ふにはいとかるゝしくことさらひ
たることなりこゝろさしふかゝらむおとこをゝき
てみるめのまへにつらき事ありとも人の心を
見しらぬやうににけかくれて人をまとはし心をも
見んとするほとになかき世のもの思ひになるいと
あちきなき事なり心ふかしやなとほめたてら
れてあはれすゝみぬれはやかてあまになりぬかし
思ひたつほとはいと心すめるやうにて世にかへり見
すへくもおもへらすいてあなかなしかくはたおほし
なりにけるよなとやうにあひしれる人とふらひ

ヒタスラ 是ヨリ心ヲオコス男ヲ女テ涙シテ

何 太 ヒタスラ 毛詩 足如 月 白氏文集 永 日 日本紀 ヒタスラトウカオモハナクニシハサヘカリクトノミ鳴ワタルラン 伯拱

御ひコタナ 御覧 白氏文集 礼記 有 何ニ
後漢書注 鄭玄曰 礼記云 后之言後 謂在夫之後 故以女謂後 達
後達礼記ノ文分明也 但御ノ字モ又有其謂 伊勢物語ニ云アル子タチ ノオホナノ前ヲワタリケルニ 俗ニ母コ姉コナトイフ皆此字也 カシワノ四十四

ヒタイカミヲハ 何ニ 鑷 ハサミ

ウナヒソニ 頬ノ下 何 頬ニ 文選 ヒソム 古出 抱仙 出 万葉 万葉一 人ノナソ寸ニ句ノスケミ生タル心ハ又年老スレハ口ノ スケムヲモ云 百トセニオモヒツチヒソムヨトムモ我ハイトハシ恋ハニマストモ 顰眉 又 竊眉 目ヒキモ泣 祈ナリ 八雲抄云 スコシシメリホケタル様ナリ

ニコリニシメル 蓮葉ノニコリニシマス 心モテ何カハ露ヲ玉トアサムク

やふらひえたすらにしも思はぬにもあらぬをとこ
きこえて後はいとはやうふみこころちなるとも君
のけんいかなれなわか家もあらはるさなと
いかにもひさいかにとうきさきわてあへなく
いかはてはいうちひ我もみぬうしきのふまし涙
こ違うめ違いわわくちとふえりんしえも
く御きうもむほうめふあやをけもなのくん
きなしとみ給つ御しまにわよ志めはふあとよわも
ふまうるひめそいりへまてあきえりもたく
よひぬへくうおかゆあたえぬすくせあさうしてあ
波かもなさそう流ねとりうんも御りてあひうひ

トアラニオリ 別ノ前ヘ少限ヲカニニシテイメラハトヘ
見スソシタラニ 何ス スベシ シタルナリ 空蝉 ミスベラ ニヌキスヘシタル衣トアルモヌキスヘラカシタル
我モ人モウシロメタク ワレモ人モ出テ後 ハ何トシテモ心ヲキ気色可有ト
ナノメニ移フ 円吹ノ 平ナ可分別 忍楽
ヨスカ 何 便 万葉 志賀ノ山イタチ キリノヤラオラカヨ ヨスカノ山トミツシハニ
ウラムヘカラニ ウラミ メモオホツカナキトオモ ホユル 頼心ナキ 紫上 心ミタシニウラム 心モノトヤカ云

てむかしもかくこそありけんきさらきもえすくし
うちそへ中にもうちまゐりふかきあはれまさなりめ我も人も
うしろめたくおもはれしやいふかひなき
うつくしうなりあけくれむかしひとをうらみて気色にはこうむ
かんりぬをこうまいりなんいふかひなきさ
あわともみそめしいさしいとなしくもはすさ
うさせよひうふおもひてもあはぬへきはりさせ
なくむたちおよくぬへきわさなかりにて
はの事なさしうふへんす御あまうなりこまて
はまふわれめのうらむへるむとなるもりく
ういつまはするさはるつきてにはまさとうさは

ツナカヌ舟ウキナルタメシ 何 観身岸額離根草 論命江頭不繋舟 古人只一同ニ此詩ヲ載タリ 兆民其心ヲ相沿遠スル也 詩者以是無常ニ譬タリ 此沿ハ浮跡ノ心ヲ以管見ヲ勘ヘシ
文選ニ汎乎若不繋之舟 荘子注 又賈誼服鳥賦曰 野馬入室 主人将去 請問于服 予去何之
邂逅作者之意趣 習カ自営
アヤナシ アナキナシ
ウナツク 何 頷 點頭 漢書 顔許 頷状 南子 頷許 花仙窟
ノトヤカニ 花鳥 モノニメヤカニハ思ヒアリ ヘカリシルト有 又後ヤスクノトヤヤカニ

ぬるしおほくいまうんも見る人のこゝろにはさらにゝも
すへしおまわむくゝまうちゆるへ見えぬおちたるを
心なすくらうたなやうあまゆるをのほりかゝろ見
うかれたるうかくあるうしほなめぬみそれうあまさの
ためしもけよあやうしさいねらぬかといゝは中将
うなほくさしおなかておりしとも義ともあしぬふ
いらん人のみれりしけなさうたりひあらんこう
大すなるへけきわあんはやまちなくてこすくさは
さしぬけしてもなとの見さうむかしおかえさまと
うれさしもあらしともかくもたゝふへまふし
あらむ我のとやうやう見えされけんよわかゝのり

物定博士 何 此名目 先朝勘得例令 物合判者 日ノ…
ヒヾキ 何 軽粧 京極殿不従位覇子 自筆本ニヒイキトアリ 軽粧ハカル…シキ姿カ 或説云 鷦ノウツシカヲ…ホコリテ羽ヲ…
ヨロツノ 久遠 大通 智勝仏 化城 狂 讃仏
木ノミナタクミ 見ヨリ工匠 絵師 手書三蹟ニ… 名伝ハ… 工匠モ家居 定タル筋ヤウノ物ハ上手ニミユルト 何 木ノミナタクミ 良匠如削木
廿八ニ 何 宿老 宿耆 宿老ノ字 皆忌心 左道 物ナラヌ 新猿楽記 諧謔

事あるまじうわらはやいひて我いもうとのひめ
君いこれさきめふりあひなへまさ思へはあれのうち
孫ふわてらとはませなうぬとさうくしなんや
ましと思ふるのかとりのさきめのはうせりあわて
ひゞきぬるなりかゝわいこれさとりわきさ見てんと
ふへておへまうひぬなへまうへ川せ事ありよう
へそれ同せ見乃みちれたくこのもろの乃こと我ん
小袖のきそつくわいさすもまんしのまてあそひ
をみてそれ物と給ひさゝ袖しぬいそはきされい
こたるもきぬおうたまへうわくわと時ありはき
はくさ袖我りへてとめりきまめうはわてねかし

ウルハシキテウト　美麗調度

又作所ニ　西宮抄ニ有式乾門内東掖ニ宗ノ南有別當五位花入ノ類也
スミカキニエラハレテ　河シタヱツ先墨ニテノカタノ上手ノワサナリ彩木書毛云ハ色トリハソレヨリモツキノワサ也一説墨付人ト色トリ工ハトカクニキラハシテモアリヌヘシスミ画ハ上手ナラテハカキエヌモノ也
唐國ノハケシキ獣　張衡傳云容易志三画者問之對曰狗馬ハ尤難ク鬼魅ハ易云也
メニミエヌオニノ　河韓子曰客為齊王畫者問之對曰狗馬最難鬼魅最易狗馬人所知也旦暮於前不可類之故鬼魅無形者不可類故易又文選曰畫鬼魅易成好畫狗馬難為好　三都賦

まことにたいしとしてはことにうるはしき人の
でうどのかざりとするさだまれるやうあるものを
なんなくしいづることなんなをまことのものゝ
上すはさまことにみえわかれ侍る又ゑ所に上ず
おほかれどすみがきにえらばれてつぎ〳〵に
さらにおとりまさるけぢめふとしもみえわかれず
かゝれど人のみをよばぬほうらいの山あら海
のいかれるいをのすがたからくにのはげしきけだ
ものゝかたちめにみえぬおにのかほなどのおど
ろ〳〵しくつくりたるものは心にまかせてひと
きはめおどろかしてじちにはにざらめど

スクヨカナラヌ　河健　花鳥家後集
スクヨカナラヌハツヨカラヌナリ俗ノスクミタルハロキトイフ也
ソノ心シラヒ　心シヤ也
心調　心知　気色ソクハリ
テシカキ　相坂ノ関ノシミツニ影ミエテ今ヤヒクラン望月ノ駒
大宗時柳公権筆諫云心正則筆正

さてありぬべしよのつねの山のたゝずまひ水のなが
れめにちかき人の家居ありさまげにとみえなつ
かしくやはらひたるかたなどをしづかにかき
まぜてすくよかならぬ山の気色こぶかくよはなれてたゝ
みなしけぢかきまがきのうちをばその心しらひ
おきてなどをなん上ずはいといきほひことにわろ
ものはおよばぬ所おほかめるてをかきたるにも
ふかきことはなくてこゝかしこのてんながにはしりかき
そこはかとなく気色ばめるはうちみるにかど
〳〵しくけしきだちたれどなをまことのすぢをこ
まやかにかきえたるはうはべのふできえてみゆ

余一タビトリナラベテ 木伐ノ関ノ岩カドアヒテ山ハナノ 雰ハラノヨニ 未詳

ハカナキコト 右ノ三熟ニ ノ枕ニキノスサミサヘシ ニシテ人ノ心サニハイハ ダトヘテ云シ

ミルメノナサケシハ 尚ふミルメノナサケハ メノミカメキトナリ

ツラツエ 何吟哲文頗 曉燭前 白氏文集 古ヘナケキコル山トシ ころノ涙ヌレハツラツエノミソ先ツカレケル 六帖

ムツコト 何親言 古ヘムツコトモ今ハ何ニカセン クニ朋ニケリイツラハ秋ナ ノ長キテフヨハ

係ルニ人ハ世ノ改ニ 世上ノ善悪ヲシラセナシ

ハヤウニタ下ラウニ 何ハヤウハサキ 過ニシ方ノ ニモハヤウス三位ケル トアハ ハヤツハ ヤメエサセツルヤウニ

逢見てもひとりなきぬるてみまほしきちになん
よろつのことはかなくこそ侍れまして
人死なんの時はあさましくきしまとめくらんあるめの
なきけなんえふれむましく思ふ給へえて侍ふそれ
りしめ此事すくしくしともや侍らむとそち
わく井よ逢いをめさ後し給ふ中わいこしく
信んしてつれは恵をつよてむかひぬ竹へまかる
法師の世のさとりをききりきん西のんちはる
ものはいおりしけまとかくいはいそいまのくも
つねともえたひとくめすなんわかく成なんやうに
いましけらうふ侍し時あそれと思ふ人侍こさえ

こホ三モ 真帆 ソナレキノミナレ 二ホトハウルハシキ ニホナラスハウルハシカラヌヘシ

サウ〳〵シテ 物ラ淋シ 一キルシ 不足

オヒラカ シトナシキ 心緒名陀 ハナタラカ ナルベシ

カク数 ヤラメカシ カラミ 水面ニカク

させつ後やうふかくさちなきいとまほしめもならさわ
しうはまうたほとのすきんちふはし人をとまわ
ふとも思ひとくめ侍ら後へとはおりひなかう
さうくしくてとかくまの事れ侍しをも此恵む
しをいとく志侍しいんはまよ事いとかくらて
あひらのなら後しおもとおもひはくあまわいと
ゆるしなくうふうひ侍しもうはさくそかくうん
なうぬ男をみもたあたそめとかくしと思ふらん
とんくるしきおわくも侍て志まんまんおさめ
らうく座うなん侍しこ此女のお後やうりとまわ
思ひいさらさわりふことゆもりのてこ此人死なめ

ナキテヲイダシ 此女ノ分別ニ不及トモ男ノタメニナラバトテ心有トミエタリ

スヽメル 進ミ過タル 何ニスヽメル 強健 コハゾシテツヨキ心也

ウトキ人ニ見エバ 何ノ用ニ不見 見應 笑 白氏文集

なきてをいたしをくれたるすちの心を
もなをくちおしくは見えしとおもひはけみつゝ
とにかくにつけて物まめやかにうしろみつゆにても
心にたかふことはなくもかなとおもへりし
ほとにすゝめるかたと思ひしかととかくになひきて
なよひゆきみにくきかたちをもこの人にみやうとまれ
んとわりなく思ひつくろひうとき人にみえは
おもてふせにやおもはむとはゝかりはちてみさをに
もてつけて見なるゝまゝに心もけしうはあらす
侍しかとたゝこのにくきかたひとつなん心おさ
めす侍しそのかみ思ひ侍しやうかうあなかちに

斜 ナノメハ物ノ落タル 云ノ心ホノム

したかひおちたる人なめりいかてこるはかりの
わさしておとしてこのかたもすこしよろしくも
なりさかなさもやめんとおもひてまことにうし
なとも思ひてたえぬへきけしきならはかはかり
我にしたかふ心ならは思ひこりなんとおもひ
たまへてことさらになさけなくつれなきさまを
みせてれいのはらたちゑんするにかくおそましく
はいみしきちきりふかくともたえて又みし
かきりと思はゝかくわりなき物うたかひはせよ
ゆくさきなかくみえんと思はゝつらき事ありとも念
してなのめに思ひなりてかゝる心たにうせなは

イヒソシ作ルニ 河言殺 イヒコロス ホトヽ詩ニ備殺 愁殺ナト多作ス 至極シタル心也

いと悲しとなん思ふへき人なみ／＼にもなりすこし
おとなひんにそへて又ならふ人なくあるへきやうなと
かしこくをしへたつるかなと思ひ給へて我たけく
いひそし侍るにすこしうちわらひてよろつに
みたてなくものけなきほとを見すくして人かすなる
世もやとまつかたはいとのとかに思ひなされて心
やましくもあらすつらき心をしのひて思ひなほらん
おりをみつけんと年月かさねんあいなたのみは
いとくるしくなんあるへけれはかたみにそむきぬへき
きさみになんあるとねたけにいふにはらたゝしく
なりてにくけなる事ともをいひは

オヨヒ 河 大海指

けまし侍り女もえおさめぬすちにておよひ
ひとつをひきよせてくひて侍りしをおとろ／＼しく
かこちてかゝるきすさへつきぬれはいよ／＼まし
らひをすへきにもあらすはつかしめ給ふめる
つかさくらゐいとゝしくなにゝつけてかは人めかん世をそ
むきぬへき身なめりなといひおとしてさらはけふこそは
かきりなめれとこのおよひをかゝめてまかてぬ
手をおりてあひ見しことをかそふれは
これひとつやはきみかうきふし
えうらみしなといひ侍れは
さすかにうちなきて
うきふしを心ひとつにかそへきてこやきみか手を

加茂祭　欽明天皇ヨリ始申
臨時祭十一月下ノ酉ノ日大裏ノ北ノ陣ニテコナハル
新嘗祭十一月午ノ日アリ祭ノ北祭トモ云也
臨時祭寛平元十一月廿一日始ル
同臨時祭洞楽
十一月午日北陣ニ瑞
握屋有儀式有御食膳勧盃等
コレカ一サカリヤガル
同班アリ礼記ニ忘レ
八重ノ雲ニ云アチコチユクヘ
イヘナト思ハニヤタハ又サカリケリ
或説ニ又一サカリケルカ両説ノ
十二ノ人ハロク此ノハルト
同媚心ナニロ　世俗ニ
化ノハトアヒハユカシク
許ナリ

わか身へ我おもふといひしろい侍しうと成とと
またはかけるへきさまとくもおもひ出へきなりつ日は
小家まてきそうこもはつもはまあくうま成りわお
里く小まんし此祭乃てうかくよ秋空ていうしう
思うれ小家夜これかま成りわか家ゝ雨ふて思ひ
めくるきは我家ゝとおもひんのさいなりつ里くも
う我わるゝ此なひ孫もすさましの家へく気色いめ
ふおもふかいそいろさ女くやと我りふ出へくまし
うはいつうおもへ家とくしおもみうてう雪残うち
いつひはゝ友まひとわ物くあくう家れとさ里とと
もこまひ日は乃うしみいとけなん思ひ小絡へしたり

火ホノカニ壁ニソムケ
欸ニ残燈背壁影　白氏文集
ヒキアノヘキわカそヒ
同ニ　几帳帷也
サウシミ　正身　万葉
男女モニ主人ノ
セウソコモセテ
同　消息アルカタ
アリサニ　白氏文集
ヒタヤコモリ
同　直隠　或菴宅
ウキニヨリヒタヤコモ
リト思ヘモアフミノ海ハウナヒテシヨ
アヘキ心地シテ　前馬ニ係リテヨミ有ハ我ヲ思故ト思ヒ
サルニ我ニソヒタルテヨ
リ我小袖ヤウノ物大切ニスル一入我ヲ思フ深キ故ト

火ホのかへかへむけなえたるさぬともの小ほ
きえるる我母いなるこよつちうけて身あくへ身
物のうくひゝめとうちわきてこよひりわ座とまち
かきふさ成あわさまいちとんおこわせろうさらし
みえなしさ家へ身女家ともちうわとまわてかや乃
家よこれよさわみんわさわめる北ちさへ待まえん
なほうしもそうまん気色いめふきうこともきていと
ひさやこりわ小なきけなまわしりいおへなおまん給
しそさうなくゆるしなうわしも我をうとくこまと
思ふかさ此心やあわれんとさしも見許へさわし
ことなきとん屋ましおまくにおもひねしふきうる

ソムキモセス・ー
同ニハシメハ世ニソムキスヘキ身ナニメリトイヒシニイニ・メソムカニヤリトテ田カノヨ寸ニトハス二差ケシススモカクレシノハスシテツ井ニハヒカクレタルトシテしか、ヤヤシカラスハハナカ、ヤク心し

へきものゝよりわれもかうとくめたるいはあひしさに
いとゆかしくそはまとふに我みすゝてんはせ
さんなん思やわらし給ふたゝしきまゝともにたへて
思ひたる給へるいかゝしと思ひ給へてやゝくいひ侍
しのひつゝ世にさもせすゆめのまとひさんともめくくれ
しかるひをかくやのしゝいのへはるたゝおまし
なりいえなんみすくれまいらあるたあて乃やくるの
ありおりひなるいなんおひみえるへ真なるといひしを
さわともえ思ひなふれしと思ひ給へしそのいし
りしこゝさんれんすそしのあるためんともいりけ
いたくつらひきそこをしはひるいとゆたく思ひ

ワナヒキテミセシ
引ヨセハタヽニハヨラテ
春駒ノワナヒキスルソ 甲行
名ハ立ワトキクソ 尺奥入
同ニ此哥心不叶ワナ引ハ嫌拓 心し 秘説アリ

タハフレニツ、
アリヌヤト心ミヤテラ
アヒミタハタハムレテ
キコテソ云ミキ古イ

あけきそうこはつゝとなくまつはひてうらのなく成侍
よりうへたゝふきまゝくなんおほくしはしひとへよ
うちふれてふりんうるいさんかわかそておかぬへく
なん思ひ給へ出らるゝそうらみまあるこゝと猶もはいと
此大方なるひはいせたるよりひなきらしきうち浪な
えめといひんやものりしなりたなりぬれはゆも
たとはましくそれかいもくしてうはさくなん侍
とていと若と思ひ出たる守れうれたかなるされたち
ぬふるはのとめてなのきちまめりまう給えまし
誉ぞそれさるた姫乃かきかはみしくりのおかし
りのなかに花もみちといふもおほのの色あひはかない

竜田姫トイハンニモワキナカラス七夕ノキニモー
同ニ
後ニ見ルコトニ竜田ヒメハ保成事カ七夕ハ義経心也 後撰 同後 達ハ七夕ワメニ同シソテタチヌフワガハ今スソ有ケル
竜田ヒメハ秋ニモナルカ龍田姫モミチナソムトヤ山ノテルラン 紫之春ハ佐保山ノ神ヨリ事オコリ
佐保山ノ霞ノ哥ニ
ヨセテ春ヲ保ル神ト
イヒ秋ハ竜田山ノ神ヨリ事オコリ紅葉ス詠スル故ニ秋ヲソムル神トス 又臣ニ神名ヘ但春ノ
竜田ヒメノ哥万葉ニアリ桜ノ哥ニ ワカユキハナヌカハスキシ立田姫ユメコノ花ヲ風ニナラス十
秋ノサホヒメハ不見ル
ワキナカラス 可然く
ウルサク 常ウルサシト
云心ハアハルヽトハスハワラシ同モウルサシト云ハ雑捨ん 一方ニ十キト云心ナリ

物ナトソメ出ス上手し
同ウルセク ウルハシクし

なくりのくしのうぬも露のたへなく落しぬる
わさなわさなはりしよわなこさ世といさゝめかは
たるそやといひもやし竹ふさてみむなしては
うわかよひし雨も人もたちまさわんちをまこと
小ゆへおとえくぬへくうちちゝりしまつきうひ
ひく侍まなとて侍よ口つよ見え飛たとくしかう
すえきてさわ侍こ見えるめもことも侍く侍しつも
こ見さゝ那物をうちとけたるしこみて時くかく
侍へえ侍し経ハこよなくこし侍ときわ侍きこ見人
うきてはいつのしいきん何のしまなかつゝも才覚あるは
うひなくて志をしく成うわれるゝまてまをすゝし

ウナトケシル　指ノヒ
ソカ事ニシテ时ノ
古枯ヘカヨヒタルヽ

スキスルハカヒナシ
過去事不レコロ房
チラワカルヘキ事ヨ
リシ入ノ

シハく　同 屢
論語曰屢者数也
数ヲカサヌル心ヽアラ
ハヽヒナリ

まそゆくえんりこ見まし哉すいめよ侍のぬ雨
おほにうちこ見むへくいえこすうまくくりのを
えを侍るなとにさ見ひてんうはきほ人そあわ候る
し神無月の侍ほひ月影もこ侍りのまし夜うち
よわ成うそ侍ふりしおほうへ人まおひて汁車り
あひのわて侍まは大納言の寿よ成うわと成るむ也
ゆるにこ見人いふやうにはひ人まつらんやとなん
あやしくんくるしきとてこ見女は寂たよ花ぬ
たえわけまいはまたるくつまよわ池は氷のけみえ
て月たるやと除すゝ寂をすきんもさんのまてわか
侍ねうしりとよわさるんをうはきほまやあわきん

ヤレハタヨキス　同ニ
古今 吹風ニアラヘツク
ルモノナラハ此一本ハヨキヨトイヽシ
春風ハ花ノアタリヲヨキテフケ心ツカラヤウツラフトミム

他ノ氷　同　此三月ノ
ソヘエタルシヨメル　句哉
雲井ニテアヒカタラハス月ヽニモ我宿スキテ行キハナシ

笛トリ出テ吹ナラシ 風俗通曰笛武帝時丘仲所造或黄帝時伶倫造之云々 同ニ說文曰笛漢武帝時丘仲所造長一尺四寸今時所吹笛者唯有七孔 悉曇蔵云伶倫造笛文比乃取嶰谷竹以学鳳皇鳴者也笛有十二孔也二孔闕而不傳其九孔者以出五音 又曰笛滌也蕩滌邪穢納之雅正 說文曰笛七孔長一尺四寸 輪曰笛本四孔少高音君明復加一孔於下為商音後出五音舊則五音異俗用也

カゲモヨシハアスカ井ニ ヤドリハスベシカゲモヨシミモヒモサムシミマクサモヨシ 飛鳥井ハ京ニ有清水ノ寮方里ノ小路ニアリト云リ 律 花鳥云飛鳥井ノ律ノ云ヘカケモハ木陰ミモヒモハ寒水ノミマクサハ草ノ事也

同ニ和琴ニ能鳴ス調アリソレニヨソヘテイヘル 和琴ハ伊弉諾伊弉冊尊ノ時今作出 佛說樂器 同ニ和琴ニモアツマゴト云ヘ鴨長明記云和琴ハ元ハ弓六張ヲ引並テ用ケル後ニ琴ニ作ルノ件弓ハ上総国ノ 古注文云弓六張神楽料矣 家上ニ置之也

律ハイニシヘ乗成ニアフ

メテハスノモトニ 同感情

この男いさゝかすきて門ちかきわたりのすのこにたゞ
はしにすわりけて、とりの月をみる葉ひさし面さしゆく
うちそゝろひまそて風ふきほへ萩の葉のみまゐらせと
先とけよみえゐわふとしわなかくの笛とりいでてふ
きかすし氣色なとはちわうふきまとり
よくなれまこなれとみへなかくほうのは
しくきさわおきたわし ぞとなうりいりてさうし
まちのきこへい女の物やうちふきなさしして
すゞうちわ我こえたるもとめきたるとおあそ
なまいさよくすゝめ月りむれはなかゆすれと
こいゝくめてれのをとりあゆみきそ夜乃竹簾

庭ノ紅葉ニツノフミワケタル路モナシトナントヨミナニス 同秋ハキヌモミナ八庭ニフリシキヌ道フミワケテ問人ハナシ 勵ハエスヘシ

琴ノ音ニモ月ニモ 同定家ノ歌菊モエヤラスモ云ハ 観行本ハ月ニシ

ニクハナルシモシラチ 女ハタルカオルシモシラズ シテノヘシ

正平 二勝絶 三下 四双 五鳧鐘 六黄鐘 七鸞鏡 八盤渉 九神仙 十上 十一壹越 十二断金

破瑟為二十五絃 一丈二尺秦始皇時破二十五絃為十三絃今箏是也昔以竹造之其後以桐造之也

同或物云漢髙帝使素女鼓五十絃瑟甚悲帝禁不止

よもすがらたるはともあけまさりとまし葉哉
おわて
契りし此君を月もえならぬ宿なりつましなき人を
ひき琴やとめくらふわかめわなをといひてとひとあそ
出しやまつ美人のあるなめこいたうぬといさ
くわぎまうしまは女いとうかはくろひて
まうしゝ小侍おりれぬは笛の孫をひきとゞむ
つまことやさらなきのとなまめきたるはすにゆく
あるとまきてえさうのことをいんきさきてうり
ちつへてとめしくうひこきんさかはまをとうとな
さうはあまねかきまいゆさん琵なんしねした

古今一
折テミハオチソシヌヘキ
秋ハキノ枝モトヲヽニ
ヲケル白ツユ
イツクニカヤトリハトラニ
アサヒコノサスヤヲカヘノ玉サソウヘ

时くうちよろこふ宮はらの人々なとのあくまてさ
まへみすきさふらいさてもおほかるうちはおかしくも
あらぬ色ことおほくみてもさ様なるてさまねよん
うと思ひ折へむよはたのもしけなくさしすくひ
たわさんをうまてうれ秋のことふみとはきてこう
給のわたくかしこうれふうれ事哉思ふたまへ
ありに子にまうた時のんふさまおさやうりもそ
出たる事もいとあやしくおりけふく御行え
侍きをもうねそ給しそさ乃となん思ひ日折へられへ
花清ん乃まくふおうハ落ぬへき萩乃露ひろたく
参くなんやうえゆ給むけくのう色れおられなと乃

ミヽモノ　ザレモノし
又思癡者カ
水江浦嶋子長哥
古河ノ思ヘ人ノ和妹兄ニトコ云リ

えんよおへのなる寸まくしさ乃え出うおもし
くお月さふらめいまさわともなくやうせはまわれ
みとすおかしさつわ侍なんなまのしかいやしき
いさめみそ給ふたまあらん女よはんをうをたまへ
あやまちしそらん人おうさくれなは名誉もたそつ
へきりのあわとい申しむ中わまいおうな清く恋
すうしうさえそさるすとは御月をへおめわい河
かるふ侍きてもんわろくはしたなりきるえん物
うるわの成やるてうちわくひおれさうす中将なよ
かしい、ま物のもれ語をきんとそいとまおひてみ
うあわしん人のさそてもみつへおけつひなわし

らふへき物としも思ひ給へさりしかと
なれゆくまゝにあはれとおほえしかはたえ〳〵わすれ
ぬものにおもひ給へしをさはかりになれはうち
たのめるけしきも見えきたのむにつけてはうらめし
と思ふ事もあらんと心なからおほゆるおり
〳〵も侍しを見しらぬやうにて久しきとたえ
をもかうたまさかなる人とも思ひたらすたゝあさ
ゆふにもてつけたらんありさまにみえて心くるし
かりしかはたのめわたる事なともありきかし
おやもなくいと心ほそけにてさらはこの人こそはと
ことにふれて思へるさまもらうたけ

なりきかうのとけきにをたしくて久しくまから
さりし比このみ給ふるわたりよりなさけなくう
たてある事をなんさるたよりありてかすめいはせ
たりける後にこそきゝ侍しかさるうき事
やあらんともしらす心にはわすれすなから
せうそこなともせて久しく侍しにむけに思ひしをれて
心ほそかりけれはおさなき物なともありしに思ひ
わつらひてなてしこの花をおりておこせたりし
とて涙くみたりさてその文のことはいかにと問
給へはいさやことなる事もなかりきや
山かつの垣ほあるともおり〳〵にあはれはかけよ

山カツノカキホニハヘル青ツヽラ人ハクレトモコトツテモナシ

昔物語メキテ
花鳥ニウツホノトシカゲヤ娘ノ事ヲ云リ 北山ノ巻ニ住スロ、玄ハ何氏不知古キ物ガタリトこれ也
サキニシル 常夏ニソメ白シヲヒシナテシコニ玉カツラヲヒス
ヤマトナテシコヲハ同牛表 戸部
サキニアレハカヤヨナテシコノ名詞トヨミハ玉カヅラ君ノイフソレヲハサシヲキテイモトナテシコ
アイ我ノ心ニ哀ト思ハニキリイスハ鳴エフカヤノヤニトナテシコ 日ナリヲメニスヘシトソ思フウヘシヨリイモトヲカスルトコナツノ花
鐘愛抽衆草故ニ号撫子艶色猗装千年故曰常夏 和哥序家経
古哥 後セニ 安た星ノニレニアフ夜ノトコ夏ハオハラス民ソ見ケヤリケリ
大カタノ常夏サヘ袖ノ白ニテキニ秋ノ気立ソフトし

なでしこれ露思ひ出しまゝに成りわたらわし
うれまいのうらそあまそあまれうらめしき物おもひかな
めではまてたる虫乃露しけきをなりめて虫乃声に
きかへ気色もなく物語めきて物あはれなし
されはしらぬはいはまほしきにもとのこ
ものはりしくなかなか成まとなてしこを見さし
まきてまはちわとたゝおもひやみたうれをとな
うちうる小袖も露ちまよとこのまよ風しまま
うら秋もさひしくわとまうれなまらひなしてまのあ
くしくうしみえたるさ色もみえも涙をめうし
おとしてもいとたゝはりしくまゝしけよ色さう

サスラヘ 俗傳 流離 日本紀
サニヨヒアリクヘし
何俗傳 又龍鐘
流離 日本紀 已ニ忍俗傳十年事 强ニ移栖息ニ按安ッ 杜甫
カクモアノガラアレ
我ヽ君不行頻君心
苦シクノ息ヘミセスハカノ夫テアノカラサラテニシト思ヘトミし
コレコソ 馬汀ニエミニ
二物ハチゞシメルヰノコツ
中ねノメニフ
コレサンテアコラシトタ偽
ノ思シモシラテノ今文
我ヤ思ニナリタルトし

りかくしてつゝき残も思ひきわかくわとみえんは
まわるをくるしき物とおもひさわしうはんなき
すくてみとたく気侍しかとにはもなくさうつき
けちてうをましかまゝ世をかろいはうあき世まう
ちょとふえんのまゝと思ひし経りわつくり
経てき思ひまとりもをしまみえましうはかくもあく
からふさゞさうましなるなとぶえんをうまさうるもれ
まれしてなうをえるやうも侍るまゝうれかてし
これらうたく侍しのはりのてさうかんなむおもひ
たまふうふをいまりえしうぼつき経ねらまあまさう
の好ひはるりの家ぬなあし家めまゝつまでなくて侍る

片オモヒ　イセノアマノ
朝ナユフナニカツクテフ
アハビノ貝ノ片思ヒナル

吉ス
人ヤリノ道ナラナクニ
大方ハイキウシトイヒテ
イサカヘリナム

ムチコカルハ　後セン
身ノウキヲニハミヌニ
ナリスヘミ思ヘハムチノ
コカレノミスル　日涙ニミ

三教指帰云　寧莫術波女伽之焼目　杜仙宮
一寸如焦之心胸中火消二年不乾之涙衫上雨收

しと思ひはかるをもつて行末たえさかしもやく（無益）
なきことをもひるわきわざやうくわすまじきさ
たふうまたちさえしも思はずなれすわく心と
やわらぬむねこりはいたもうむかうわしる
寔なんえたりまはしく老のしけなきうる哉
夕暮のさまいふのれ物も思ひいてあはうさわ
すれうはけまとさしわかてこんふはまつゝり
くよくきひもあまたなる事もあわなんやもと乃孫の
またぬきんのとくしさも色ある罪ならはの
へしらみんをとなきもうさひうふへけまたいは
まとはかに思はさらめんふめるゝう世事やたゝ

世中ハクラヘクルシク
ナリニケリ長ク短カク
思フスナナシ

吉祥天女　在金光明最勝王経
同端厳ノ天女也　方
ヒ氏仏眷属也ハ法気ワキテワウ

おくうとらくしよくらへくらしかなへ来ぬもさ敷
くれのよ記のきなをとわるしなんすへ来くきりひ
かのもぬ人そいわにあるもあらん吉祥天女なと思ひ
りんとすまはかうけはまくすしあらんきうまさ
まひしのわぬへけまとて元来えひぬ歌の所
また気色あはすいあらんすうしはのうちやきと
さ治しはさものしとよはたてらゝりきこしめし
所侍らむといへとう此君のめやうふなそしと
をあ妨へいなさ事をとわやさんと思ひめくら
まし小ゆる文妻乃生て侍時うしこなる女此ための
をなん只妨へしうのある町の中なるへはやうよれは

やけことをもいひあはせわたくしさまの世にす
まふへき心おきてを思ひめくらさんかたもいたり
ふかくざえのきはなま〳〵のはかせはつかしくす
へてくちあかすへくなん侍らさりし　そのかみある
はかせのもとにかくもんなとし侍とてまかりか
或ヲカ師近ノ所ヘ通ヘ河師娘ヘ入トナリ
よひしほとにあるしのむすめともおほかりと
きゝ給へてはかなきついてにいひよりて侍しを
秘フタツノ道ーー
二ノ道、花鳥ニ樂天
秦中吟ノ全句ヘ
貧家ノ女富家ノ女得失ヲ論スル也先富家ハ嫁娶ノヿ不足ナキ故早ク其ヿ叶ト云圧ツ井ニハ夫ヲカロニスル可成
又貧家女ハ且ツヿニキツーシノ不成圧其シウトナシトニ孝行ノ全カルヘシトハカセノ女ヒニユヘ云キカセケルヘ
河両道ヘ富家女ハ
軽其夫貧家女ハ
孝於姑ト云心ヘ我ハ貧家ナリトナノルヘ　両途ノヿ白氏文集秦中吟ニ見タリ
おやきゝつけてさかつきもて出て我ふたつのみちうた
ふをきけとなんきこえこち侍しかとをさ〳〵
うちとけてもまからすかのおやの心をはゝかりて
さすかにかゝつらひ侍しほとにいとあはれに思ひ

うしろみねさめのかたらひにも身のさえつきおほ
やけにつかうまつるへきみち〳〵しき事をおし
へていときよけにせうそこ文にもかむなといふ物
をかきまぜすむへ〳〵しくいひまはし侍りしにおの
つからえまかりたえてそのものを師としてなん
わつかなるこしおれ文つくる事なとならひ侍し
かはいまにそのおんはわすれ侍らねとなつかしき
さいしとうちたのまんには無才のひとなまわろ
ならんふるまひなと見えんにはつかしくなん見え
侍しまいて君たちの御ためはか〳〵しくしたゝか
なる御うしろみはなにゝかせさせ給はん

おしくちおしとかつみつゝたゝ我心につきすく
せのひくかた侍めれはをのこしもなんさ井
なま〳〵物は侍めるとや中将はのこりをいはせんとて
さてもをかしかりける女かなとすかい給を心え
なからはなのわたりをこつきてかたりなすさて
いとひさしくまからさりしにものゝたよりに
たちよりて侍れはつねのうちとけゐたるかた
には侍らて心やましきものこしにてなんあひて侍る
ふすふるにやとをこかましくもまたよきふしな
りとも思ひ給ふるにこのさかし人はたかろ〳〵
しき物ゑんしすへきにもあらす世のたうりを

河 延喜式云八十種草薬 内四種草薬 中蒜是極熱草薬也又食薬ヲ雑薬ト云

思ひとりてうらみさりけりこゑもはやりかにて
いふやう月ころふひやうおもきにたへかねてこく
ねちのさうやくをふくしていとくさきによりなん
えたいめん給はらぬまのあたりならすともさるへ
からむ雑事らはうけ給はらむといとあはれにむへ
〳〵しくいひ侍りいらへになにとかは
たゝうけ給はりぬとてたちいて侍るにさう
〳〵しくやおほえけん此香うせなん時にたち
よりたまへとたかやかにいふをきゝすくさんもいとほ
しゝはしやすらふへきにはた侍らねはけに
そのにほひさへはなやかにたちそへるもすへなくて

秋セコクハキ霄ナリ サヽカニノシモノフルニヒ 中ヨテ知シモ 知人キテコ寸ハ蜘ノ 上下四ノ涜スルト乀

にけめをつかいて
式 はくうのみのまへにひきこもるさかりの蕾なりひるま
すくせといふかあやなさいかなることつけそやと
いひもはてすはしり出侍ぬれはおひて 追テハ其侭ニアラス祖右モ能ヤル可成イヤ乃浩心ス
女 逢事乃よをし隔てぬ中ならはひるまも アスナスヽ成间ヒルシイトフト乀
何かまはゆからましさはいふもくちとくなといひ侍き
と志つ〳〵と申をは君たちあさましと思てそら
ことゝてわらひ給いつこのさる女かあるへきおいら
かにおにとこそむかひゐたらめむくつけきこと
はしきをしていはむかたなしと式部をあはめ
にくみてすこしよろしからむ事を申せとせめ

給へと是よりめつらしき事はさふらひなんやとそや
うそおかすへて男も女もわろものハわつかにしれる方
のことをのこりなくみせつくさんと思
へるこそいとをしけれ三史五経乃道〳〵しきかた
をあきらかにさとりあかさむこそあいきやうなから
めなとかハ女といはんからに世にある事のおほやけ
わたくしにつけてむけにしらすいたらす
しもあらむわさとならひまねはねとすこしも
かとあらむ人のみゝにもめにもとまる事しせん
におほかるへしさるまゝにはまんなをはしり
かきてさるましきとちの女ふみになかはすきて

五月ノ五日ニ
三日ニアヤメヲ献ス
五日必称ス
公事根元 推古節ニ同元日七日十六日豊明五月ノ節會ハ天皇武徳殿ニ行幸アヤメノカツラヲカケ玉ヒテ内弁外弁ホ
節會ノ如シ宮内省
献菖蒲内侍女蔵人
儀令傳イトスヲ群臣ニ分ヲ三献ニハリテ五府騎射ノ事有騎射ハ同ニシテ菓玉五月五日ノ菓玉ノ料菖蒲艾スヘ設
一輿ニ盛 盛ル臺ニ居三日ノ平旦ニ内侍ニヤ南殿ノ前ニ列ヲ設 ○水菖蒲右天平十九五月ヨリ始
アヤメノ几ヲタテル
群臣ニ菓玉ヲ玉フ
其後騎射ノ事アリ
九日ノエンニ 南殿探イン群臣ニ菊酒ヲ玉フ菓ヲ東ヘ。ラクロ菓瓶アリ
九日五月五日ノ節會ニ同帳ノ左右菓東ノ臺ヲ掛御前ニ菊瓶ヲ置菓東ノ房ヲ折柱頭ニ付ル ○菊長房 汝南桓景ニ語ヘキウノ

うきすくめするはなうるてこの人氏多を屋かなく
まうはとみえさわん館よはさしもわもはさうめ
かなのほりきたとくしきこえふすえあさまか
とはたきとさらひかわれい上らかれ中はも
おかのなれ事なりし斎よむと思へる人の屋りてあ
かまほりまほかしきふるるをもりしめとりとわ
こみはゝすさましたおわくよめりけたるこう船
しきこゝとかまうへしせはいなきけなしえせ
さうむ人もりしたなりんさほへきさ芸などそ月
せちにいさいまれあしたなほのあやめも思ひ
まちめしまぬかえあうぬ孫をひまうけ九日乃えん

河菊ノ花露ト共ニ華ヲ
イサ折テヌレナン袖ノ
カコソ句ハメ 六帖

ありまほうく花猪のんをわりひめくろしいとは
なきわうに葉乃露をとりこうちほすをかとやうのはま
あさいりゝなとゝあわせさなりてもそのはりりけよ
は小思へはわりしくもかゆもあはへかわくふ事
乃そみれわれよほゞなくめかもとはらぬなど秋を
えりろんよいそてたる中にんをされて見ゆる絶
はのすあなとのはさてとわ月ゆるわかうこ時
くり思ひまりぬそりわのんをそていよしたみなさけ
たくさうんめやすうるへきすへてんりまらもん
うすなもきこゝはかわりまそあしいゝは後は
かうん事城もひとりふ後乃ふしいすぐきへく

なんあへつきゐるといふに君ハ人ひとりの御
ありさまを心のうちに思ひつゞけ給ふこれにたらず
又さしすぎたることなくものし給ひけるかなと
ありがたきにもいとゞむねふたがるいづ方
によりはつともなくはて〳〵はあやしきこ
ともに成てあかし給ひつからうしてけふは日の気色
もなほれりかくのみこもりさぶらひ給ふも大殿の御
心いとほしければまかで給へりおほかたの気色
人のけはひもけざやかにけだかくみだれたる所
まじらずなほこれこそはかの人々のすてがたく
とりいでしまめ人にはたのまれぬべけれと

おぼすものからあまりうるはしき御ありさまのとけ
がたくはづかしげに思ひしづまり給へるをさう
ざうしくて中納言の君中務などやうのおし
なべたらぬわか人どもにたはぶれごとなどの
給ひつゝあつさにみだれ給へる御ありさまを
見るかひありと思ひきこえたり大臣もわたり給ひて
うちとけ給へれば御几帳へだてておはしまして御物語
きこえ給ふをあつきにとにがみ給へば人々わらふ
あなかまとてけうそくによりかゝり給へりいとやすらか
なる御ふるまひなりやくらくなるほどに今宵中
神うちよりはふたがりて侍りけり

サカシイハ　源内府ノ旧可成サゾカシ例ニ天一神ノ方ハイミ玉ヘルナリシハ何方ヘカ行タガヒシタマハム
二条院モ葵ノ上ト同方ナレハ是モフタガリタルト云ナリ
二条院　河陽院ヲ
二条院ト号ス
脱屣之後御此院二条ハ北大宮ハ南西洞院ハ西東ハ京極ノ台跡ナト準拠ナキ事モナキヽ

紀伊守伊予介子ナリ
空蝉ニハマヽ子也

中川ハ京極川也西ハ桂川東ハ鴨川ナル故ニ中川ト云

しれいはいみ給ふかたなりけり二条院にもおなし
すちにていつくにかたかへんいとなやましきに
とておほとのこもれりいとあしきわさとこれ
かれきこゆ紀伊のかみにてしたしくつかうまつる
人の中川のわたりなる家なむこのころ水せき入れて
すゝしきかけに侍るときこゆいとよかなりなや
ましきにうしなからひきいれつへからむ所をとの
給ふしのひ〱の御方たかへ所はあまた
ありぬへけれとひさしくほとへてわたり
給へるにかたふたけてひきたかへほかさまへとおほさんは
いとおしきなるへしきのかみにおほせ事給へは

此比泉水ナトシテ涼シキトし
是ヨリイトシノヒテ方違ノ也

ミソキニテ
礼拜ノコヽロナリ

うけ給はりなからしりそきて伊予のかみの朝臣の家に
つゝしむ事侍りて女房なんまかりうつれるころにて
せはき所に侍れはなめけなる事や侍らんとしたに
なけくをきゝ給ひてその人ちかゝらむなんう
れしかるへき女とをき旅ねは物おそろしきこゝち
すへきをたゝそのき丁のうしろにとの給へは
けによろしきおまし所にもとて人はしらせ
やるいとしのひてことさらにことことしからぬ所をと
いそき出給へはおとゝにもきこえ給はす御ともにもむつ
ましきかきりしておはしましぬにはかにとわふれと
人もきゝいれす寝殿のひんかしおもてはらひ

コユルキノイソキアリ ノ
相模国ノ名所ニ云カ
ケタリ化セキノ字ニ
カヽリテコユルキノト云リ面白キサモ
サカナモトメニコユルキノ磯ニワカメカリアケニ
玉メシノコカメシ中ニスヘテアルシハイモトカサカナモキニ

あきはきてうれうゑれ御志ほらひしたかはれ
んなんなとさほかさにはしくましうわお中
おほろしもつきしておほなとんとしめてう色なわ
風情しくてうこともとなまむしのこえく
きあえはたるさけくとひ岐のひて物しき狼なわ
ひとくわさ殿よわ出たるいはみりのう様ぬて
さけのむおるしもさうれもとむとこゆほさみいう
ねわくわと春いのとやうかなのめ給てけれ中の
しかにとかいそひしこのなくなるむりしみう

思アカレル 空セミヲ
父ノ権中納言カ内侍セ
サセンメキ心アルト前ニアリ
玉ヘルコヲ思アカリタル女ナレハユカシクオボストぞ

おほしいはし思ひあかまは気さよきてまお給へる
むむしあまいゆしくそ見えてとめ給へるゆえ

ケハヒコトサラヒタリ
何コトサラニツリテ
物イフコシカ

うしおもてうへ見けりひひゐる寺ぬの声あひう
くとしてまうたあうともゆくうひはまうふ
志のひそわひふゆうさうけりひあとさうひさ
あうし我あけたわけま心かんあしとむはわ
てもろしはまいうともしあう寸美うけさうし
おかんわもわたるうしやなるうわ給てあゆやと
あはきとひまあけまは志りしきて給うえれ
ちうれはやにほとひぬたるなほへしうちはちめさき
いあうととも在きて竹へは我はうへなる色しいと
いふうまのあたちてまことさり色んあとあふよゐの
さうとまわ行へほあうさうくしのめまそさまとさほ

槿ノ姫君ニ文ヤヨハシ給フシテ初テ云ハセリ槿ノ巻ニ委シ此ニテハ文ノ奉ルト計ミテ心得ヘシ
ホヽユカメテ云ヨクヘカタルヘシ
哥ナトスシタルモ女房ノ上ニハ不宜ト也

へきくまにはよくこそかくれありき給ふなれなと
いふにもおほす事のみ心にかゝりたまへは
むねつふれてかやうのついてもひとのいひもら
さんをきゝつけたらんときなとおほえ給ふことなる
事なけれはきゝさし給ひつ式部卿の宮の姫君にあさ
かほたてまつり給ひし歌なとをすこしほゝゆか
めてかたるもきこゆくつろきかましく歌すしかち
にもあるかなゝほみおとりはしなんかしとおほす
かみいてきてとうろかけそへ火あかくかゝけなと
して御くたものはかりまいれりとはりちやうもいかにそ
はさる方の心もなくてはめさましきあるし

トハリチヤウ
我家ハ戸張帳ヲモタレタルヲ大キミキマセムコニセンミイサカナニナニヨケンアハヒサタウカカセヨケンアハヒサタウカカセヨケン
催馬楽 我家

ならむとのたまへはなによけむともえうけたま
はらすとかしこまりてさふらふはしつかたのおまし
にかりなるやうにておほとのこもれは人ゝもしつまりぬ
あるしの子ともおかしけにてありわらはなる
殿上のほとに御らんしなれたるもあり伊予のすけ
の子もあまたある中にいとけはひあてはかにて
十二三はかりなるもありいつれかいつれなと
とひ給ふにこれはこ衛門のかみのすゑの子にていと
かなしくし侍りけるをさなきほとにをくれ侍りて
あねなる人のよすかにかくて侍るなりさえなとも
つきぬへくけしうは侍らぬを殿上なともおもふ

思ひのけながらすがすがしうえまじらひ侍らざ
めなとやしあはれの事やこのあね君やまうとの後の
おやさなむ侍るとまうすに似げなきおやをもまうけ
なりけるかな上にもきこしめしをきて宮仕への人
にいだしたてむともらしそうせしいかに
なりけんといつそやのたまはせし世こそさため
なき物なれといとおよすけのたまふ不意にかくて
物し侍るなり世中といふものさのみこそいまも
むかしもさだまりたる事侍らね中についても
女のすくせはうかひたるなんあはれに侍るなと
きこえさす伊与のすけはかしつくや君と思ふらんな

いかゝはわたくしの主とこそは思ひて侍めるを
すきゞしき事となにかしよりはじめてうけ
ひき侍らすなとやさりともまうとたちのつきづき
しくいまめきたらむにおろしたてむやはかの
すけはいとよしありてけしきはめるをやなと物語
し給ていつかたにそみな下屋におろし侍ぬ
めるをえやまかりおりあへさらんときこゆ酔すゝみて皆
人ゝすのこにふしつゝしつまりぬ君
はとけてもねられ給はすいたつらふしとおほさ
るゝに御めさめてこの北のさうしのあなたに
人のけはひするをこなたやかくいふ人のかくれ

真人 紀守ツノ 玉フ賞翫シテナリ 同シ真人ハ朝臣ヨリ次也 改真人為朝臣也

空蝉ハキノ守カ母カトゆ

真人ハ兄ト云

オロシ キノ守ナト ワキノ有テイニテ今ヤウメキテ風流ナルニハキノ守ニ云イヨノ介ニ空セミヲアテヽシニイトノ玉フ

下屋 雑舎

子タリケル色ノ
室ノ声ニ小君ノ色似
タル故室ノ体ヲ
見テ小君男ナル
故ニモイモウトヽ云

たるうちふしん忘座とはかう御心とゝめてやをらおきて
たちきゝ給へはありつる子のこゑにて物
けたまはるいつくにおはしますそとかれたるこゑの
おかしきにていへはこゝにそふしたるまらうとは
ねたまひぬるかいかにちかゝらむと思ひつるをされ
とけとをかりけりといふねたりけるこゑのしとけ
なきいとよくかよひたれはいもうとゝきゝ給ひつ
ひさしにそおほとのこもりぬるおとにきゝつる
御ありさまをみたてまつりつるけにこそめてた
かりけれとみそかにいふひるならましかはのそ
きてみたてまつりてましとねふたけにいひてかほ

子ムスメケニ
夜ハ人ヲ見ヌニシト
云テイ女ノ心し

野子メフ心トヽメテ 万水ニハ念比ヘ又子タフト句ヲ切テソヽウニ問ヲ源ノ子リミ玉ヘルし
伊勢集 年フレトワスラレハテヌ人ノ上ハ心トヽメテ松キカレケリ

一口ハ 同九し
勅付夕良巻

アナクラシ 源ノ心ソ
推量シテ双地ニ云詞
ナリ

ひき入つるこゑすねたう心とゝめてもとひきけ
かしとあちきなくおほすまろははしにね侍らん
あなくらしとて火かゝけなとすへし女君はたゝ
このさうしくちすちかひたるほとにそふしたる
へき中将の君はいつくにそ人けとをき心ちして
ものおそろしといふなれはなけしのしもに人々
ふしていらへすなりしもにゆにおりてたゝいま
まいらむと侍りといふみなしつまりたるけはひな
れはかけかねをこゝろみにひきあけ給へれはあな
たよりはさゝさりけり木丁をさうしくちにはたて
火はほのくらきにみ給へはからひつたつ物とも

サヽヤカニテ　細ゝ許　遊仙窟
少ゝ　小體　何レモチイサキ心也

ども置たれはみたりかはしき中をわけいり給て
けはひしつる所に入給へれはたゞひとりいと
さゝやかにてふしたりなまわつらはしけれと上
なるきぬをしやるまてもとめける人と思へり
中将めしつれはなむ人しれぬ思ひのしるしあ
る心ちしてとのたまふをとかくも思ひわかれすものに
おそはるゝ心ちしてやとおびゆれどかほにきぬの
さはりてをともえたてすうちつけにふかゝらぬ
心の程とみ給らんことわりなれど年ころ思ひ
わたる心のうちもきこえしらせんとてなんかゝる
をりをまちいてたるもさらにあさくはあらしと

思ひなし給へといとやはらかにの給て鬼神も
あらたつましきけはひなれははしたなくこゝに
人ともえのゝしらす心ちはたわひしくあるまし
き事と思へはあさましく人たかへにこそ侍めと
いふもいきの下なりきえまとへるけしきいと
心くるしくらうたけなれはおかしとみ給てたか
ふへくもあらぬ心のしるへを思はすにもおほめ
いたまふかなすきかましきさまにはよにみえ
たてまつらし思ふことすこしきこゆへきそとて
いとさゝやかなれはかきいたきてさうしのもといて給ふにそもと
めつる中将たつ人きあひたるやや

トヤシノテ　中ねイカ程ノ[illegible]思ニ[illegible]深キテソエリヤホルトカ
源氏ト知ナリ　ソユリハヤホルト云ムカ

しくてさくわたるかたいなしくりほひ
みちてかたかもくゆまかくはんちさとろふ思ひはよわ
ぬあさましうこはりのなるうと思ひまとをまれまと
きてとんむようあしなくくの人あるいまうある
猶のかもひまりなぐる先をまたり人のゆまくさこ
らんもいつくならんもさはきそさひおたまいも
とうもなくておくあるおまうよへ頼ぬさうしを
ひきたてゝあまつよりはむりへりのきゝよいも
の仲人は母は仲人の思ふらんきとさんしぬりわ
まわなうさふなるはゝまそあをりなわていとなや
ましけなるいもわしけまかるまいれいりくわ

カヤウナルキハ主ホ[illegible]ニ[illegible]ナラバ
[illegible]ニ主[illegible]
ノ[illegible]王フト[illegible]
一部ノ内リテイ[illegible]

とうで頼ふこゝお射ふみのあらんいのりまきてふりつり
なきけくしし乃仲はくすへりめまとかいもあさ
ましおふうはゝともおわくすこうひなうぬおり
なりゝとおわりくゝし御はんの猶もいの
あさくは思ふ仲人さるむいとかやうなはさそ
いとあらう侍なまとそめかくをすち仲へふとぬかく
あさけなくうかる思はいわたるさ夜もくよいと
わしくんをはつおけりひなまはぬもさもく
をまぶ思ひまいぬういとそや舟くをしなく
さはつゝり思ひあし仲へはなんうてあわれは
をのけゝきて頼やうもあらんはなうちなるすき

十ヨ竹ノム比シテ
何山城ノヤセノサムサニ
タトメラノカケテ又ヨノ
長キ十ヨ竹　下染

去方ノ……
イヨノ介トムスヒニテ
ヘハニ心スニキトし

んハさらにあらぬをさふらへまてやおほかたくおなし

サカルキニヤ
宿所デコソアルラン

めしまてそまつふもとにわかなれはつねにとひを

みつからもあやしきまてなんおかしきまゝあさちて

よろ川よのたまへといひたえなきはなわかれまの

いよくうちとけ我ことむすまひしけれはいすく

よのおもふ絶つまなしとはみえさてまほ子とも

さならさ乃ゆふかひなきまてすくしてむと思ひて

つきなくかくもそありたわんかうのたな底ゐる

上ハヨハソ上……
十ヨ竹ノヨ長キ上ニハ……ノオキ井ヲ物ヲ思フ比ヤナ　古今

りけらまれんと志升てくまんまいなよ竹のん

ちしそさんするおもへくもあらきましとふかき給

やましくそほなる徳なるはあしき給人をいふる

ムナニ世ヲ思ニ……
卯ノ……
ト思モノ玉フ

空蝉ハ中川ノ娘

イトカノウキカノ……
縁不定……
ナトニテカクノ……
タノモ……

トカイ
トリカヘスモノニ……
世中……
……オモハム

ワカサナル後ノ山ノ……
……アハニテナラス
ケフナラス……

浜川
ウキ子ニハユメモ定カニ
見エスソアリケル

あしと思ひてあくはまなといとはつきやんかるし

くはわきとみさしましうはくちわしうましと

むほまなくちあうさくらしと物もへまたなとかく

うちましきも此ふしと物をへおおほえなおほはま

なほしもさうちまうわほとい思ひ給えめむけよ

世を思ひしらぬやうなる御ほ遠給なんいひ晴さき

かうらみられていとかくうおかの方とのさき底

しぬわしなかうろ乃男まそかく成はんりへ我見

ましうハあほまし美飛たのこまそで飛をし給ふ

のちきりや心思ひ物へなくさあまし　をいとおらう

うわなほうきさ給乃猶我思給あたくひあく思ふ給へ

まどろむにはよしといみじきと思ひけるとぞ思へ
はかなけれはいのちもとりあへすわざはかなく歎なく
さめぬことゝおぼしもなほなさぬ人〳〵おきさせ
ていみじうぎこなうしくゆゑなるかぬれ車ひきいでゝよ
なといふにわかなともいそぎおきせ女房との御うちに
うへあまり物ふかくいりける世にはへ事なといふもあわれ
れいかやうなれば事ていらん事もいとうるさし
さしはへてはいりてかはる女なとこそなよりんあとの
いみじうわかなきをおぼすにいみじうもいさしおきくけ
中将も出ていとゝうしがまさいゆかしなてもみえ
とめなきはいりてかぎりへ事世をまさらぬはんの

つらきもあはれもわきまへぬ世の思出はさぞなく
めでたくなる御事さへあはしくのれとぞうちなまめかはれ
おもはぬいとまゆめきたわやかもまさしくなくく心
あなたへしとぞ
陽成なさ段うしこともそそぬ藤宮にとかあへ
ぬまでおとゝならんやうのはわかまはおりふしは
いとつらきくはいゆきかん姫しめて一筆はあそ
あしもなほとももお思ひはいかにもすぐ〳〵し
んはまゐりしと思ひいかなはかる伊予のうさのとおもひ
過ぎまで要のやう遊らんとうれうなくほ
まし

あま乃うき城にあけくれありありてあくる朝いとわ
うき旅てうきもなかれかくる雲とおなくなかれさう
しくちまてをくわ旅うちもとも人さはなりけ連
はひまたてゝわのまと旅都とむへ旅かうくへさ法な
関とえしうわ御かね〻ゆきとさ旅てえなくのよう
らんりきりしうちなすめ旅よしれもてのかうし
うしゐおかそて人ゝみなくへうめわす乃ゝ見中の
旅かえたるさうし乃かくよわほれうかみえ御へ
れ清あわさ海をあにしむつわ思へあす我んとも
はめわ月をはわ御かそひのわれさ海達家物うる
うけさやうかみえて中ゝ御しこさあきかれなわ

なかんかきたえ氣色もたえたへえる人うへえんかもす
こくもみゆゆるかわきかれ人こ来ぬはむゝ旅かはいと
むまいさくむとはきいまえをはかぬなる身をと
かへつまみかちまそいそ御ぬ殿よかへつ御てもとみ
かもまと語まれ旅りれは又はひえる人身のさかまを
ましてうれ人の思ふうんかれうちをめのなんと
んくるしくおりひやわたまふむてまたるすいかけ
まとめやすくもそは来てもあわつ家中のまれうか
く海なくこあ川めさは人のいひしむとはなく也ら
おりいあきられたわかれかといふ大殿にのくこ御内
しまのいとうききたてゝおりかしんこものいと

おりくなんのやうしまでなるしくおもひてさりの
かく成めしたるみあはし中納言のこもえはき
てんやらうふけりえこしをあちらくはらふ人
ふきんう御ふもやまたてまつらんとの竹へいひと
かしこまおかきう小侍従わおのなる人小乃竹ひ
らんとやすもむまつまでおほせらるれおほ君れ
あかむのなとうとやもさふさも侍られさこと
せんうわろかくてりのし侍まとおやのまゐてよ
すゝへてとと思ひはあけまぞんゆかぬ御うよなんきう
めかる君のうすやよ給しくきてえし人うし
御ことによしやとのまへいなしういはらさん

御しまでみなまでうと〱しうはまゐ世乃た
とひまてむはまは給ふとやきさてみ六日なてこれ
なに井てまいまわこ御やゝのふをうしとはあけまと
なに御めきさふはさ御しておて人とみえんたわめしいま
ていかもなにはりしくうちらひ給まうんいちりいと
めてたくうれしとおりふいもうとの君れうとく
りしくとひ字給さ御へまういゝへきこえなと
してなはしくはまはまへてまいらせむとて小くし
されといとよくひきてきなかゝ御うふかう
あれこう給ふにも思ひのかりのなきとおきなんもは
ぬのくしもたとすなふこ城もてきこまい母あき

ましなふ海をいてきぬこれ子の思ふらんするも
りたなくてはまとの御かくをわもかくしふ
日頃けふわいとわけくて、
思し夢をあふ秋あわ屋とおけくまにめさん
わたそうしわも人ふ人ゆめふ夜なけ給ひなと見えを
をよりぬ給はまさなも露ふきうれてん見えぬすく
せうちうへそ人はなおりひはく参そすしかへる
まゐる日お老めしたま道てま以はとそはつへまうふ
か人はは心ゆあるへき人もなしときこえきとの
給へいう地点なそ成りふへくもお給いさわし物
をいりしさはゆきさん心いふよ、ん屋ましく乃ふわ

あくの給をまへうきて参る心も思ふよりつゝ来す
るきまるをなしいてをよすをたる事はいそるぬそよれ
さは我成いわ給うとむつかられてめはよはいりので
かとてまいわぬ其のかかんはまんふきのまくそく乃
はわはまをあさらしき物り思ひてはいさうし
あわけいこれこをともてゐしつゐぬてあわく君
めしよをて日日給くりし我物あひ思ふましきふ
めわとえんし心へをかすう地はぬめて升たわ
いつうのの給ゆしゝくとやにいふうひなのする
やあさましとてみも給へるあこいもらしふそれ
伊勢の御まなるわいさたりうし人もさまとなの

同所匣殿別当内蔵寮ト
御服ナト裁縫示ヘシ順徳院御抄
庶人モ装束調スル人ヲ云リ

りけなくくやしとてふけゆくかなるうしろみ

まうけてかくはかなきわさともあこは我

子まて我かまよふれあれりし人いりさまさし

うき身なんのかゝはいさもやわわきんいゑしうわ

かくあつうのれと思へつる身かし心うおほそこれ子我

まほいしかてうちかもぬてまいりかなとしかふ

わの清くけ殿の御てさうそくなとともせさせ給

呉服十一ト調ス心ヲ

ほとよおやめまそあはりひかゝりふとうてまよろき

されとこれ子もいとむさるしんかわほかふちわも

をはりかくしきさぬさへとわろうへんおのおわしを

いとつおなりはへて思へはめてよきすもわの方

時ハカナリ…思ヒ…見ニヨリナヽ
クニハ思ハ子…
退トシ思テエ定タル上ハ見エタテモ何ニカハセントハ

かゝるかたちおりひてうちとけたる御いらへをそ

きこえさせすほれゐのあはし御なりひあわさ給い

きをふうちへかくまやいとと思ひ出きこえねふはあるわと

わりしきさ給をえてしらそまほまでもかめてうへ

へき我とと思ひのへすうわきわ君いおかしまこさ給

時々まもなくんくほりくも悪しくもおかしいほと

中川逢王ヲ祈リ

おもへはしきさことの心かなしさをはゝれん

うさなくおほしわかなかくしくりひままたまは

なちよわかりんも人めさけりうん所々にんなま

伊予ノ所ヘ行テモトヽ

かほまのひやかふきまん人れさあめもいともし

おかしわつゝふまなれうち月のひへ給ふか

中川ノイヘニ源コモルヘシ前ノ二条院ノフタカリノ時ヲ思ヒ出テ又イヘニヨソヘカタタカヘニヨソヘテ伊予介カ家ヘヲハストナリ

さるへき方のいみまちいてゝ給てにはかにまかて
給まねしてみちの程よりおはしましたりきのかみ
おとろきてやり水のめいほくとかしこまり
よろこふ小君にはひるよりかくなむ思ひよれると
のたまひちきりけれはあけくれまつはしならし給けれは
こよひもまつめしいてたり女もさる御せうそこ
ありけるにおほしたはかりつらんほとはあさく
しも思ひなされねとさりとてうちとけ人けなき
ありさまを見えたてまつりてもあちきなく夢の
やうにてすきにしなけきをまたやくはへんと思ひ
みたれてなほさてまちつけきこえさせんことのま

はゆけれは小君かいてゝいぬるほとにいとけちかけ
れはかたはらいたしなやましけれはしのひて
うちたゝかせなとせんにほとはなれてをとて
わたとのに中将といひしかつほねしたるかくれに
うつろひぬさる心して人とくしつめて御せうそこ
あれと小君はたつねあはすよろつの所もとめ
ありきてわたとのにわけ入てからうしてたとりき
たりいとあさましくつらしと思ひていかにかひ
なしとおほさんとなきぬはかりいへはかくけし
からぬ心はへはつかふものかおさなき人の
かゝることいひつたふるはいみしくいむなるを

をとりひねどしてん婉なやましければ人〻さけ
むねさへさせてなんと聞こえさせよあやしと給
もく思ふらんやいひなおちてんれ中をはいと
かくしれさ〻まわめる君のおかしなりてすきりし
おやのはけりひと穂れさ恋になりうる夜待のうるも
まちつきさそてまつりはおりしうりやあらまし志ゆ
て思ひしりぬおかよ見けつもいよりあとしりぬ
やうりおかすらんとんなりうもむよいさくされ
うふ思ひみるとてもかくてもそいふうひなき
すくきあわりれいむしんよこう給はなくて座〻
なんと思召そうわ煮いりのふたはうわあさんと

此王ニテ巻ノ名トセリ
ハヽキノ木ホヤイツコオホツカナ
皆ソノ原ハ[illegible]ニミエリ
[illegible]

まうでおはさなおそうし給めさく侍るへかへり
ぬちうなるよしを聞こえまへあさましくめつらしう
なわりけん乃たとを君もいとをほしくおもうあわ
ぬまとしいとしくおしき侍気色やむちなうわまれも
お給まいさくうめあそうしとおかしうわ
はゝさまのんをしりてうみりうのえちよあや
なくまとひめるうれ聞こえんうちうあけましう
の御へ主母侍ものふまと給まれさわけまい
数ならぬみきやふおふ子名也うさ小あらかも
あらすさゆらはゝき木也聞こえさわ小君いとく
おし捨ふねようくもあらてまとひあわくとひと

あやしとみゆるらんとさへ思ひ給ふるの人もいきる
なまめかしと思ひまし給にすさましくおもひはべりけ
らぬまと人めかしめはべるの御ありさまをさらにかまへ
人なとまさくかへなりはべりてあらんもとまれと
うはいおもしなつかしきさまはしくはべりさらは（サモアラウレトフテメル(?)ソト）
まとあなかちをかしさもあはれはなしかくれ
たらん所にたまたまはべりていけとも思ひいかむつ
りしかさしこめられて人おはします侍めるもうしこ
けよと思ひいはしおもしと思へるよしなにこそいふ
すてたとの御ためはあるものをなさへもかく
なにのしなはなるはまとうれしくめてたしかる
おもひたまへつきなまめ人のわは中くなかまへに（小君ヲアハレト源思ソ）
あはれなるとて

○十八問答 初四 後十四

女ノ見ハシモト　親ナド打ソヒ　取方ナク　元ノ品高ク

一[五]成ホレモ 是ヨリ初ノ雑 一段ナリ　一[六]ことが中に　一[七]今ハまて　一[八]ちくしよ　一[九]まべて御の事

一[十]たゝあるへ　一[十一]御の事　一[十二]ちやうまで　一[十三]さて同し此　一[十四]何しい忘れもの

一[十五]されとかのなる　一[十六]まさ文章　一[十七]撫いと久しく　一[十八]まへて男女も